

信州から「夏」を追う

日本を東西に分ける 北アルプスの清流



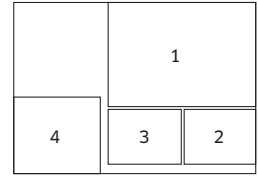
日本のフォッサマグナ(列島を東西に分ける大きな溝)を流れる姫川は、北アルプスの湧き水を端を発し、新潟県糸魚川(いとがわ)市を抜けて日本海に注ぐ。川沿いには古来より「塩の道」として整備されてきた千国(ちくに)に街道が伸び、併走するようにJR大糸線が走っている。今回はこの姫川の上流を目指し、海側から山側へと街道を辿ることにした。

支流の小滝川と合流する辺りまで来ると、そそり立つ明星山の断崖絶壁が見えてくる。急峻な渓谷を避けるため、大糸線が迂回コースをとるエリアだ。鉄道ファンや観光客にも人気で、最近ではロッククライミングも盛んらしい。車窓からの眺めは素晴らしく、雄大な北アルプスと深い渓谷が一望できる。

また、この一帯は国内随一の翡翠の産地としても知られている。日本書紀にも記述があるように、縄文時代から翡翠は勾玉などの装飾品に加工され珍重されてきた。数千年もの間、移り変わる時代の中で、姫川の清流は絶えることなく人々の営みを映してきたのだろう。さらに翡翠は6億年前にできた鉱物だという。

もはや日本列島が誕生する遙か昔の話である。人気のない山里の中で、悠久の歴史が胸に迫ってくる。

水質調査で日本一になったこともある姫川の水は清く、上流に向かうにつれ青さを増していく。澄んだ水は岩にぶつかり、勢いよく飛沫を散らしている。注意深く川の中に入り、一日かけてシャッターチャンス待つつ。夏雲が浮かぶ空の下、川辺は緑に萌えていた。



【写真1】長野県小谷村で撮影した姫川。川辺の木々がいっせいに芽吹いていた。山里の夏は短く、新緑の旬もまた短い。【写真2、3】槍ヶ岳に源を発する梓川(あずさがわ)。松本市で奈良井川と合流し犀川(さいがわ)と名前を変え、さらに千曲川へと合流する。信州の川は途中で名前が変わるものが多い。川幅を広げた中流では、水遊びをする子供たちや溪流釣りの客で賑わっていた。上流には標高1500メートルの山岳景勝地・上高地がある。【写真4】新潟県と長野県の県境を流れる志久見川(しくみがわ)。長野県栄村で撮影した。隣町には豪雪地帯で有名な津南町がある。谷に下り、岩の上を飛び、水の中を歩いていくと、対岸の名もない滝が涼しい風を届けてくれた。

